

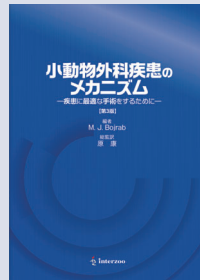


手嶋隆洋 日本獣医生命科学大学

「考える力」を鍛え上げ、  
成長し続けられる獣医師に

## Recommend

手嶋隆洋先生が薦める、この4冊



**小動物外科疾患のメカニズム**  
一疾患に最適な手術をするために―【第3版】

総監訳：原 康  
原著：Mechanisms of Disease  
in Small Animal Surgery 3rd Edition  
編者：M. J. Bojrab  
A4判 並製 1,000頁

定価：22,000円(税込)のところ  
キャンペーン価格19,800円(税込)



132号  
(2021年4月号)

手嶋先生ご執筆号

**SAMedicine**  
Journal of Small Animal Medicine

診断に導く思考戦略  
～第一線ではどう考える?～Vol.2 発行

小動物内科専門誌隔月刊誌 A4判 104頁

定価：4,505円(税込)のところ  
キャンペーン価格4,055円(税込)



31号  
(2021年7月号)

**VETERINARY ONCOLOGY**

どうする?どうなる?この腫瘍1  
臨床に役立つ治療と予後のデータ集  
小動物腫瘍科専門誌 季刊誌 A4判 128頁

定価：7,150円(税込)のところ  
キャンペーン価格6,435円(税込)



**J-VET** シリーズ ▲▲

現在販売中の全号が対象となります。  
オンラインサイトにて商品をご確認ください。  
小動物臨床総合誌 A4判 96頁

定価：3,666円(税込)のところ  
キャンペーン価格3,300円(税込)



### Information

- 手嶋先生の本インタビューは、Eduward Mediaサイトからもお読みいただけます。詳しくは<https://media.eduone.jp/>にてご確認ください。
- 先生からお勧めいただいた書籍が、期間限定にてお安くお買い求めいただけるキャンペーンを実施中(キャンペーンお申込期限:2021年11月末日まで)。詳しくは<https://eduward.online> もしくは専用チラシをご確認ください。

**EDUWARD Press**

〒194-0022 東京都町田市森野1-27-14サカヤビル2階  
tel. ☎ 0120-80-1906 fax. ☎ 0120-80-1872 <https://eduward.online>  
DM : 70001808



手嶋隆洋  
Takahiro Teshima

日本獣医生命科学大学

### 経歴

- 2005年 日本獣医畜産大学卒業
- 2009年 日本獣医生命科学大学大学院  
獣医生命科学研究所 獣医学専攻 博士課程修了
- 2009年～2011年 都内の動物病院に勤務
- 2011年～2014年 日本獣医生命科学大学 獣医内科学研究室 助教
- 2013年～2014年 テキサス大学 southwestern Medical Centerへ留学
- 2015年～2020年 日本獣医生命科学大学 獣医内科学研究室 講師
- 2020年～ 日本獣医生命科学大学 獣医内科学研究室 准教授

## 獣医師、そして研究の道への出会い

— 手嶋先生が獣医師になりたいと考えはじめたのは、いつ頃だったのでしょうか？

おそらく小学生の頃だと思います。よくある話なのですが、飼っていた犬が病気で死んでしまっただけでなく、当時の外で飼うのが当たり前で、今では考えられないくらい過酷な状況での飼育でした。柴の混ざった雑種で11歳齢ぐらい、動物病院にも何度か連れていったものの、あまりにもあっさり亡くなってしまいました。死因が何だったのかもわかりませんでしたし、当時はそこまで熱を入れて治療するという時代でもなかったのかもしれませんが、ですが、自分の中ではモヤモヤしたものを感じ続けていて、漠然とですが「獣医師を目指したいな」と思いはじめました。ですが理由あって、理系の別の分野の大学に進んでしまいました。

— 一度、別の進路を選ばれていたのですね。

自分の中のモヤモヤは残っていましたので、中退して、改めて日本獣生命科学大学（日獣大）の獣医学科を受験し直しました。日獣大だけが、当時住んでいた大阪からすぐ行ける京都で受験できて、私学の中では一番学費も安かったという単純な理由です。研究室についても、僕らの頃は本人の希望が通りやすい時代で、病理と外科のいずれかで悩み「より入りやすい外科に」という選び方でした。外科の研究室で担当教官だった原 康先生が下垂体の手術を始められたのが、ちょうど私が大学院に進む少し前ぐらいだったと思います。大学院でも下垂体やクッシング関連の研究と臨床に携わっていきました。

— 下垂体の手術には、どういった難しさがあるのでしょうか？ ご苦労された点などは？

実際に手術されていたのは原先生で、僕は術後管理や病理診断を担当していました。原先生は「下垂体腫瘍が原因なんだから、第一選択は外科だろう」と、簡単におっしゃるんですよ（笑）。「口の中から鼻の中を通して、頭蓋骨の底を削って、下垂体を取り出すだけだ」と。

— プロフェッショナルだからこそ、の言葉ですね。

ええ、本当に。あとは、東海大学伊勢原キャンパスにある医学部に、下垂体領域の病理を専門にされている長村義之先生がいらっしゃって、いろいろとご指導いただきました。ミーティングが朝早くからあったので、伊勢原まで通うのはきつかったんですが（笑）、やはり、そこで得られる知見は非常に大きかったです。日獣大に閉じこもっているだけだったら、それほどよい研究はできなかったと思います。

## 「自ら考える力」を鍛えた臨床医時代

— 大学院で4年間研究された後、一度、外部の一般の病院に2年間勤められたと伺いました。その臨床医時代を振り返っていかがですか？

最初は全然使いものにならなかったのをよく覚えています。臨床医としての経験が少なく、学部の新卒の先生とほぼ同じレベルでした。当時はやはり「戻れるならば大学院での研究に戻りたい」という気持ちも強かったのですが、今振り返ればあの2年間だけでも、一般病院で一次診療に携わられたというのは、自分にとって非常によかったのだと思います。

— 具体的によかったと感じる点は？

大学病院に来院するケースというのは、一次診療で色々治療し



て、上手くいかないから、紹介としていらっしゃるわけですね。その一次診療のプロセスが、大学だけにいるとはっきりとはみえないですし、類似の症例が実際にどのくらいあるのかもつかみにくいといえます。一般の病院に勤めることで、自分で学ぶと機会をもてたのがすごくよかったと思います。もう一つ、何よりよかったと思うのは「学び直し」ができたことです。最初に勤めた一次診療の院長は、聞けばなんでも教えてくださるものの、「とりあえず自分で一回調べてみる」ことを大事にされていました。知識は自分で考えて初めて身につくものですし、逆に経験だけで判断するのも違うな、と気付かせていただきました。「この薬を飲めば治る」とか、「これまでに俺がみた症例はこうだからこうだ!」というのではなくて、優れた臨床家は、誰かが聞いても理解できるような筋道を、きちんと説明できる獣医師なのだと思えるようになりました。大学はどうしても専門診療に特化して視野が狭くなりがちな側面もあります。今、消化器や内分泌の病気を想定しても、「実は腎臓にも問題があるのではないかな？」など、他の疾患を含めて考えることができるようになったのは、一次診療での経験があるからだと思っています。

— 考える力を身に着けるために相当な努力をされたのですね。

そうですね。1つの症例からなるべく沢山の情報と知識を仕入れられるようにと考えていました。大学院に行っていた分、同期に比べれば臨床に携わるのが4年は遅くなったわけですが、それは簡単に埋められる差ではありません。私は覚えることが得意な方じゃありませんから、「考える力をつけて、同期との差をカバーしよう」と考えました。例えば、「昨日から下痢をしています」という症例の場合なら、薬を飲めばすぐに治るだろうと想定できたとしても、まずは検査で異常値が出ているのはなぜか、それがどうしてこの症状につながるのかということ、意識的に考えるようにしていました。

— 弊社が発行している「SA Medicine」も、一次診療医時代に活用くださっていたとお聞きしています。

SA Medicineの初期シリーズなどを大学の図書館で全部コピーして、ファイルに閉じて活用していたのを覚えています。著作権法的には、本当はいけないかもしれませんが（笑）。当時は実際に症例を目の当たりにしても、どうすればいいかさっぱりわからない状態でしたから、かなり参考にさせてもらいました。生理学や解剖学の細かい情報も網羅されていて、実際の治療ではそこまで詳しい情報が必要ない場合もあったかもしれないのですが…。でも、今思えば付随するその他の疾患の鑑別につながったり、自分の知識になったり。すごく力をつけられる、好きなシリーズでした。

## 臨床のための基礎研究こそが大学の役割

— 大学院に戻られてからの経緯や研究内容について、詳しくお聞かせください。

内科の教員として大学に戻り、当初は大学院時代と同じく下垂体の研究を続けていたのですが、2年ほど経ったところでアメリカに留学する機会がありました。アメリカのヒト医学領域の皮膚科ラボで、肺へのメラノーマ転移に関する研究に1年ほど携わりました。帰国してからは下垂体の研究からは徐々に離れていきましたが、その代わり幹細胞、いわゆるステムセルを

治療に活用する研究に携わるようになっていきました。

— 新しい分野の研究に進まれたきっかけは？

普段の診療で内分泌系や消化器の症例をみる機会が多かったのですが、これらはなかなか完治しないですね。特に大学で診させてもらう症例は、「この薬をこの期間飲めば治りますよ」というものではなくて、薬を飲みながら、上手く病状と付き合っただけでコントロールしていく必要性が大きい。そうすると、ステロイドを使わなければならない症例が多くなるのですが、幹細胞を使って炎症を抑えたり免疫調整ができれば、ステロイドに代わるものになるのではないかと。完全に置き換えることはできなくても、ステロイドを使う量を減らしてあげることはできないだろうかなど、そういった想いから研究を始めました。今は幹細胞にも様々な種類があります。僕が研究しているのは、脂肪組織から採取した幹細胞です。ヒトのiPS細胞のような本格的な再生医療ではないのですが、炎症を抑えたり自己免疫性疾患などのコントロールという意味では、可能性が非常に大きいとみています。皮膚病やアトピー性皮膚炎の治療など、活用できる範囲は今後もっと大きくなっていくのではないのでしょうか。

— 実際の臨床例は、そろそろ出てきているのでしょうか。

はい。臨床で幹細胞を使われている先生からは否定的な意見はあまりなく、「結構効いたよ」という声も頂戴しています。今後の研究を通じて、なぜ幹細胞がその症例に効くのかを論理立てて明らかにしていければ、今は懐疑的にみている先生も「使ってみようかな」という方向に変わるのではないかと思っています。獣医学の世界は、ヒト医学領域とは違って「とりあえずやってみて、上手くいったら採用しよう」という部分があります。柔軟ではあるものの、それだけでは学問として成り立ちませんし、発展がありません。ある程度しつかりとした、臨床医の先生が活用しやすいデータやエビデンスをいかにたくさん出せるかが、僕ら、大学側の役割なのではないでしょうか。よいデータなら臨床医が新しい治療法として活用してほしいし、副作用なども含めたネガティブなデータもしっかり発信していければ、研究への信頼性も高まる。これは私見ではあるのですが、臨床現場では時間的にも設備的にも取り組みづらいう基礎研究を担うことこそが、大学教員の仕事なのではないかなと考えています。

— 最後に、これから獣医師として羽ばたこうとしている若い獣医師に伝えたいことは？

普段、学生によく伝えることは「考えなさい」ということです。テスト対策の丸覚えができるのは、若くて記憶力があるときだけで、一生通用するものじゃありません。「大学で、年配の先生たちが第一線の診療であれだけ活躍できるのは、丸覚えしているからではなくて、考えてきたからだと思うよ」と、学生によく言っています。自分でじっくり考えて、悩みながら病気を治す。原因を突き止めようとするときに、考える力が養われるからこそ、それまで全然みることがない病状や珍しい病状でも、アプローチしていつか診断ができると思います。最初はしんどいですが、自分で考えなければもたもた経験したことのない症例がきたときに対応できませんし、逆に経験だけに頼るだけでは上手くいきません。今は、カラー画像が豊富な資料や書籍も多く、僕らの学生時代に比べれば羨ましいほど恵まれた時代です。せつかく武器があるのですから、あとは「自分で考える力」が加われば、よい獣医師に成長していくことができると思います。